
血に魅せられた者

カイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血に魅せられた者

【Zコード】

270490

【作者名】

カイル

【あらすじ】

「ぐく普通の高校生活を謳歌していたのに。あの夜日常が崩れた…

- ・ 俺は鏡華のこと意外は普通だと思っていたのに。彼女に・・・吸血鬼に出会ってしまった。

あの夜から俺の世界は変わった。

プロローグ

俺は他の人と違うところがある。普通の人間とも言えるだろう。だが、俺は人と違う・・・。俺の中にはもう一人の俺いや私がいる。いつからだろう、意識したときには私は存在していた。二重人格というやつだ。どちらかが指導権を握っているわけではない。一人で意識を共通している。二人で会話することが当たり前だ。俺は、私は一人で一人なのだ。

この事が奇怪に遭遇するきっかけになるとは思つていなかつたんだ。俺も私も・・・

何だつてこんなことになつた？

くっそ！日常が崩れしていく。俺が悪いのか。朝起きて日常を送つていたはずなのに、あれは何なんだ。

『さよな聖！何あれ？！』

『俺が知るかよ！早く逃げねえと』

この夜、日常が崩れた・・・

プロローグ（後書き）

初めて投稿します。
暖かく見守ってください。

侠聖 side

♪ペ・ジ・・ペ・ジ・！

『田原ましの音で田を覚ます。寝起きはこじまつだ。

『おはよう、起きてるか? 鏡華。』
つて、起きてるわけねえか。

『起 も もー!』

『ひーおはようござります。少しでもやすみな・・ ぐー』

『寝る感じやねえ一起きりー。』

『わかったよーつか、声元でてるよー』

『げ、やっぱー。』

『

ふうーあぶね

『気を付けてよ。私のことばれたたら逆されるかも知れないんだから』

『わかつてゐよ。気をつけろ。つて、お前がすぐに起きれば問題ないんだよー。向で寝起き悪いんだよ。俺なのに』

『何でだひづねー不思議ーまあ、違いがあるひことじまーこと事じや
ん

俺達は、意識を共有している。それが当たり前で嫌悪を抱いたことはない。

鏡華とはもう一人の自分だ。名前でわかるように女だ。まあ、他の人間から見て俺は男だ。女顔・中性的だとは言われるが断じて男である！

『いいじゃん。女顔』

『よくない！男にナンパされる気持ちがわかるか・・・つか、心を読むな！』

『ごめん、だつて、私は嬉しいし』

そうですね。鏡華は女ですものね。

意識を共有してはいるが全くプライベートがないと言つ訳ではない。心を読もうとしなければ、すべて伝わることはない。

俺の名前は神野 一郎^{じんのう} 、 侠星^{きょうせい}。男子高校生だ。極々普通の学生で、普通よりちょっとと裕福な家庭だ。

『普通じゃないでしょ』

くっそー そーだよー！そーですよ。言つてみたかっただけじゃん！

俺は普通じゃない。

鏡華がいる。

鏡華を認識したのは3歳のときだつたと思つ。名前は俺がつけた。鏡華は気に入つてくれた。

そんな3歳児にして名前を付けた俺は最初から普通じゃなかつたんだろう。

同世代の子供たちとは遊ばなかつた。鏡華がいたらそれでよかつた。

両親はやつぱり心配していた。だからといって、病院に連れてかれると言つことはなかつた。そこは感謝している。この事は俺の両親は知らない。鏡華ことを言つては駄目だと分かつていた。そんなことを言つたら、鏡華が消されてしまつ。俺にとつてはなくてはならない存在。2人で神野 侠星が成り立つてゐるどちらかがかけたら駄目だ。

鍵を閉めて学校へ向かう

「『いってきます』」

「「ひーん 朝は気持ちいいねえ」

『うっへ私は寝ていたいよ』

『まだ寝るのかよ・・・つか、寝れるだろいつでも』

『そりだけど・・・

侠星と同じに過ごしたいの。運命共同体でしょ。』

『お前言つてて、恥ずかしくない?』

『恥ずかしくないもん!』

『侠星とずっと一緒にからね。』

『ああ』

「はよー 侠星ちゃん! 今日も綺麗だね」

「ああ！ 侠ちゃんじゃねえ！ あと綺麗とか言つな……沙希」

「『めん。』『めん。』冗談だよ。朝から怖いよ。」

『いっは、叶野沙希

同じクラスで、幼馴染だ。

『天は一物を『えず』』といつ言葉があるが、『いっは』には『まら』ない。

俺より頭1つ分低いが女子では高く、手足はすらりと長く、赤茶色の腰に届く長い髪を背中に流している。長い睫毛と大きな黒い瞳。まあ、美少女ってやつ。

そして、全国模試1位、成績は常にオール5。頭脳明晰、容姿端麗。男子・女子ともに知らぬものはない、人気者である。

「はあ～、俺が女扱いされるのいやだつて知つてんだろ。たぐ、気をつけるよ。」

「うん。『めん。』

「俺も朝から怒鳴つて悪かつた。」

頭を撫でながら、言つた。

沙希の顔が赤い。

何でこいつ赤くなつてんだ？ 熱でもあるのか？

『侠星つて鈍感……』

『なんか言つたか？ 鏡華』

『なんでも～沙希が可哀想なだけ～』

はあ？訳がわからん。

「侠星、侠星ー。」

「つまー。」

「もつー、侠星つてほーとじてる」ということよ。学校行こう。遅刻しちゃう

「ああ わかってる。」

「うして俺達の日常は始まる。」

沙希 side

あつ！侠ちやんだ。

「はよー 侠ちやん！今日も綺麗だねえ。」

「ああ！侠ちやんじやねえ！あと綺麗とか言つな……沙希

「“めん。めん。朝から怖いよ。」

侠ちやんに怒られた・・・

前まではちやん付けで呼んでも怒らなかつたのに、

神野 侠星

身長は高く、瘦せ型だ。思いのほか筋肉はしつかりついている。肩に届くすこし長めな黒髪。左目はグリーン、右目はブルーのオッドアイだ。何でも外国の血が入っているらしい。普段は黒のカラコンで隠している。

侠ちやんは綺麗だ。男の子なのに女性に受けをとらない。女顔だ。本人はめちゃめちゃ気にしている。

だから、女扱いしたり、顔のことを言つと怒る。

「はあ～、俺が女扱いされるのいやだつて知つてんだろ。たく、気をつけろよ。」

「うふ。じめん。」

「俺も朝から怒鳴つて悪かつた。」

頭を撫でられた。顔が一気に熱くなる。
侠ちゃんは平氣でそういうことをする。はあ～女心わかつてないよ。
そこが侠ちゃんらしいけど

「侠星、侠星」

聞いてない。昔から「うつ」「うつ」とがある。

「侠星、侠星！」

あつ、戻ってきた。

「もつ～、侠星つてぼ～としてる」というよ。学校行こい。遅刻
しちゃう」

「ああ わかつてる。」

れあ、今日も一日頑張りますかあ～！

日常（後書き）

第1話です。うう、短い。。。文章力がないですが頑張っていきますーーよろしくお願いします！

口傳の終わり（前書き）

やっと進展しますーー！
ちょっとですが・・・今回も短いです。
頑張って書いてこきますのでよろしくお願いします。

口算の終わり

暗い 暗い 暗いよ

何も見えないよ

「……は？」

どうして私はここにいるの
お母さん！ お父さん！ 助けて…！

・・・・・

何で！ 誰もいないの？

誰か 誰か 助けて…

誰かここから出して…！

「やつと、やつと見つけました。このときを永い年月、待ち望んで
おつました。

愛しの我が主。

必ずやあなた様をあの薄汚い人間から取り戻します。しばしの辛
抱でござります。」

「はあ～やつと終わった

『お疲れ様～今日も一日頑張つてお勉強しましたねえ。』

『おう～学生の本分は勉強だからな～！』

『はあ～とか言つて苦手な教科は私と代わるくせに

『お前も表に出たいだろ？』

『せりやね～でも、侠星がいるからいこよ。』

『そつかあ 今度一人でどつか行くか～！』

『マジ！行く～どこ行こうか？

遊園地？ 映画館？ ショッピング？』

『どこでもこよ。お前が行きたいところに行け。』

『さあ、デート代を稼がないとな～として、バイトに行くかね～』

『やつと終わつた。』

今日は満月か。

もう遅いってのに起ること思つたぜ。

綺麗だな

何だらう。いつもは夜空なんか気にして見ないのに

今日はやけに気になる。

それにしても本当に綺麗だ。

ドックン！

つつ！何だ今一瞬胸が痛かつた。
気のせいだよな・・・

たく、店長の使いが荒いせいだ！！

そうだ！きっとそうだ！

さつさつと、帰つて寝よ

「み つ ・・・」

『ん？ 鏡華なんか言つたか？』

『何にも？ 早く帰ろ。』

「み つ け た・・・」

「何か聞こえた。」

『私にも聞こえた。』

「やつと見つけた・・・

我が主に害をなすもの。殺す・・・殺す・・・生きては帰さない。』

その声の主は、闇夜に光を照らす満月を背にひらりを見ていた。

姿は見えないが、暗闇に光る赤い瞳だけははっきり見えた。

なんだあれは！何だあの化物は！－

身がざわめくような感覚、そして懐かしい感覚。

今、俺はなんて思った！

懐かしいだと－

あるはずない。そんなこと思つわけがない。

あんな化物知らない！－

とつあえず、ここから逃げなければ…やばい

何だろう。懐かしい気がする。

私、あんなやつ知らないのに

何でこんなに愛おしいんだろう…

『鏡華、鏡華…』

『どうした。逃げるだ。』

『えつ… ひつ… 早く逃げよつ… やばいよあれ

「逃がすか！ やつと、やつと見つけたんだ！－薄汚い人間め！殺してやる！－

お前を殺して我が主を取り戻す！！」

はあはあ・・・

ここまでくれば大丈夫だろ。
何だあいつ

「くつそ！ 何だよあれ 気持ち悪い、全身汗だくだ。」

『だめ！ もつと遠くに逃げなきや！ あいつが来る！』

「逃がさないと言つたはずだ！ 我が主を還してもひつ

「さつきから何言つてんだよ！ 我が主つて誰のことだよ！ 還すも何も知らねえよ！ ！ 誰かと勘違ひしてねえか！ 化物！ ！ ！」

「化物だと！ 薄汚い人間」ときがほざくな！ ！ 我は、高貴な吸血鬼だ我が主は貴様の中にいらつしやる
我が主、真祖の吸血鬼にして吸血鬼の皇女。

リシャ ル・AINSTO・HAインツベルグ様を貴様を殺して取り戻す！！

口算の終わり（後書き）

次回はちょっとバトルでも書いつと思こますーー！
読んでくれると幸いです。
感想待つてますーよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7049o/>

血に魅せられた者

2010年11月25日15時49分発行